

日本学術会議 基礎医学委員会 神経科学分科会(第25期・第6回)
臨床医学委員会 脳とこころ分科会(第25期・第6回)
議事録

- 1, 開催日時 令和5年8月22日(火)10:00~11:30
- 2, 開催場所 日本学術会議 大会議室及びオンライン会議システム併用
- 3, 出席者

【神経科学分科会】 21名中13名

出席者: 伊佐(委員長)、柚崎(副委員長)、池田、入來、岡野、岡本、上口、川人、佐倉、定藤、仲嶋、西田、渡辺

欠席者: 大木(幹事)、渡部(幹事)、大隅、岡部、上川内、見学、合田、平井

【脳とこころ分科会】 38名中24名

出席者: 高橋(良)(委員長)、林(朗)(幹事)、古屋敷(幹事)、青木、池田、池淵、伊佐、尾崎、笠井、川人、熊谷、齊藤、高橋(英)、内匠、坂内、藤井、松井、三品、水口、南、村井、山脇、吉田、渡辺

欠席者: 加藤(副委員長)、内富、岡部、神尾、萱間、神庭、國井、坂田、積山、戸田、林(由)、寶金、三島、三村

4, 議題

(1) 前回の合同分科会の議事録の確認(資料1)

伊佐神経科学分科会委員長から、令和5年3月22日に開催した前回の合同分科会で「神経科学領域における倫理的課題」に関する見解発出、学術会議シンポジウム「こころの病」の脳科学」について議論したことが説明され、議事録が承認された。

(2) 「神経科学分野における倫理的課題」の見解について(資料2, 3, 4, 5, 6)

伊佐神経科学分科会委員長から、「神経科学分野における倫理的課題」の作成過程が報告された。特に、神経オルガノイドの作成に関する記述にやや偏りがあるとの尾崎委員の指摘を受け、実験系の研究者と倫理系の研究者の両方が執筆すること、9月中旬を締切として統合版を執筆者内で回覧、修正中であること、その後、分科会委員や関係者からコメントを受け、コメントを受ける関係者の候補について分科会委員より提案を募ることが報告された。

また、意思表示の手続きが改訂され、対応委員会に事前相談し、分野別委員会、部内で査読があり、対応委員会が承認する手続きがあることが説明された。一般人向けであるとともにエビデンスベースを外さないこと、問題点の指摘だけでなく、現実的な観点を加味した、実装に繋がる内容であること、分野横断的な議論による解決策の提案、意思の表出の種類に応じた質の確保、分野横断的課題、新分野への対応など、科学的助言等対応委員会から意思の表出案の作成にあたっての問題点が示されており、意思表示が以前より難しくなっていることが報告された。そこで査読の様子を見つつ、次期の早いうちに提出を目指す方針が示された。

尾崎委員(第二部幹事)から、意思表示の査読の現状が報告された。これまで表出された意思のうちエビデンスが明確でなく、効果的でないものがあるとの反省から、今期からは科学的助言等対応委員会が設置され、意思表示の査読のプロセスが追加され、また幹事会でも精査するようになったことが報告された。また、期末に提出される意思表示の申請が多く、査読が完了もしくは最終段階にあるものがある一方、査読の負荷は過剰になっているため、意思表示は期末に固まらないよう申請することが望ましいことも報告された。

伊佐神経科学分科会委員長から、「神経科学分野における倫理的課題」の未定稿をもと

に、意思表示の様式や記載事項が紹介された。作成が二期に亘ることから、神経科学分科会、脳とこころ分科会、移植・再生医療分科会の委員については来期外れる委員も記載したいとする方針が示された。今後の枠組みとして脳科学の推進プロジェクトの課題設定や治療法の策定に際して倫理的課題を取り扱う場を設置し、当事者や異分野の専門家、そして市民を含め、常に新しい技術や研究成果が社会に与える倫理的インパクトについて議論し社会的合意を形跡する仕組み作りを進めることも提案しているが、主に問題点の指摘となっていることから、提言内容を検討中であることが報告された。

高橋(良)委員から、「終わりに」で、社会に対する提言内容を項目別に示すこと、その案を各執筆者から募ることが提案された。

尾崎委員(第二部幹事)から、個別分野のみに関わり学協会等で代替可能ではないか、関係する市民や団体、関係機関などとの意見交換の場を設けているか、提言等発出後も、関係する市民や団体、関係機関との意見交換や公開シンポジウムを行うなど、提言等の実現に努力するか、など、査読にあたり確認を要する事項があることが指摘され、本見解発出にあたり、研究への患者・市民参画(PPI)に関する試みを行う重要性が提案された。

伊佐神経科学分科会委員長から、前回の関連シンポジウムの登壇者や当事者から見解案について意見を受け、場合によって対話を行う必要性が提案された。

熊谷委員から、海外でのガイドライン決定では当事者の視点での分かりやすさやスティグマの増長の恐れを確認するとの情報が提供された。また当事者のうちでも、当事者団体の代表など長年自分以外の当事者から意見を集めている方が望ましいことが提案された。

尾崎委員から、現案では神経修飾法(ニューロモデュレーション)が軍事目的にも使われうることが記載されているが、デュアルユースに対する考え方の相違が日本学術会議と政府との関係を難しくしてきたことから、慎重な記載が必要であることが提案された。

(3) 公開シンポジウム「「こころの病」の脳科学」開催について(資料7, 8)

林(朗)委員から、公開シンポジウム「「こころの病」の脳科学」が分科会後、午後から開催されることが報告された。開会では、高橋(良)脳とこころ分科会委員長、梶田隆章会長、武田洋幸第二部部長の挨拶の後、学問的なバランス、疾患のバランス、ジェンダーのバランスを鑑み、尾崎委員、林(朗)委員、高橋(英)委員、岡田俊氏、内匠透委員、加藤委員を演者として選出した。総合討論では未来志向の議論を期待し、指定討論者として池淵委員、北中連携会員、大隅委員、記者の影本氏、出版社の家田氏、加えて演者でもある加藤委員、尾崎委員を選出した。閉会では、伊佐神経科学分科会委員長、池田アディクション分科会委員長の挨拶を設けた。現地開催ではあるが、講演部分のみ録画し、後日YouTube配信することにした。

(4) 総会報告(資料9)

伊佐神経科学分科会委員長から、前回の合同分科会の開催以降、総会が4月と7月に2回開催されたこと、いずれも主に学術会議のあり方に関する政府の検討状況とその対応について議論がなされたことが報告された。

尾崎委員、伊佐神経科学分科会委員長から、日本学術会議と政府との関係悪化には会員任命問題が端を発していること、会員の選考過程に透明性が欠けるとの批判があり、政府は第三者による選考諮問委員会を置くなどとする日本学術会議法改正案を提案したこと、日本学術会議は日本学術会議法の5要件の一つ、会員選考における自主性・独立性に鑑み、同改正案の国会提出を思いとどまり、協議の場を設けるべきとする勧告を發出し、政府側も同改正案の国会提出を見送ったこと、その後、政府は民間法人化を含めた日本学術会議の組織形態を検討する有識者懇談会を設置し、今後検討が始まることが報告された。この議論が今期から次期の移行期に行われるため、混乱が予想されるとの見方が示された。

西田委員から、意思表示の査読の混乱に政府対応が関連している可能性が指摘された。

またデュアルユースに対する見解の発出が検討されているが、会員・連携会員に情報が十分に提供されていないことが報告された。

(5) 来期(第26期)の分科会の体制について(資料10)

伊佐神経科学分科会委員長、尾崎委員(第二部幹事)から、伊佐神経科学分科会委員長、川人委員、西田委員が会員の任期満了であること、来期は神経科学分科会では柚崎委員が会員に、伊佐委員長が連携会員に、脳とこころ分科会では高橋(良)委員長と熊谷委員が会員に任命される予定であることが報告された。

尾崎委員(第二部幹事)から、活動が明確でない分科会があること、構成員数が多い分科会があることから、幹事会で分野別委員会に附置される分科会等のあり方の見直しが検討されていることが報告された。神経科学分科会・脳とこころ分科会については、ともに公開シンポジウムや意思発出など活動は明確であるが、脳とこころ分科会の構成員数は38名であり、幹事会が検討の目的で設定した30名という基準を超えていた。幹事会では尾崎委員(第二部幹事)から、日本学術会議は各学協会ではできない分野横断的な取り組みや国民との対話を意識した意思発出を行うことを目的としており、その目的達成のためには十分な構成員数が必要であることが説明された。現時点では、分科会から意見を聴取しておらず、幹事会でもコンセンサスが形成されていないことから、分科会等のあり方の見直しは決定事項でないことも説明された。

伊佐神経科学分科会委員長から、分科会等のあり方の見直しについて、「原則として分科会等は期ごとに設置する」という点は問題ないが、「委員会及び分科会の委員長は会員のみ」に・・・限定する、「1分科会等あたりの委員数に上限を設ける」という点は問題が極めて大きいことが指摘された。

尾崎委員から、「委員会及び分科会の委員長は会員のみ」に・・・限定する」という点は、なくなる可能性が有るとの見方が示された。

伊佐神経科学分科会委員長、高橋(良)脳とこころ分科会委員長から、来期の分科会の設置については、神経科学分科会は次期会員(予定)の柚崎委員、渡辺委員、および現委員長の伊佐委員長により、脳とこころ分科会については次期会員(予定)の尾崎委員、古屋敷委員、および現委員長の高橋(良)委員長に一任いただき、次期委員会では作成中の「神経科学分野における倫理的課題」の見解発出やシンポジウムを行うことが提案され、承認された。

(6) その他

高橋(良)脳とこころ分科会委員長から、今年度で革新脳と国際脳が終了すること、文部科学省ライフサイエンス課は日本脳科学関連学会連合の将来構想委員会と連携し、次の6か年のポスト国際脳・革新脳のあり方を検討し、国際脳と革新脳、将来的には精神・神経疾患メカや横断萌芽も含めた包括的な脳神経科学統合プログラムとする構想を検討しているとの情報が提供された。

川人委員から、文部科学省ライフサイエンス課とのやり取りで、ポスト国際脳・革新脳として、革新脳で構築したマーモセットのデータベースと国際脳で構築したヒトの画像、患者データベースの統合、即ちモデル動物の研究とヒトの研究の統合、また行動・病気から遺伝子まで階層を繋ぐ計算論的なアプローチの重要性を確認したとの情報が提供された。また、政権からの要望で、元々国際脳では精神・神経疾患まで包括しているが、特に認知症と関連づけた疾患理解・診断・治療法が求められるとの情報も提供された。

池田委員から、文部科学省ライフサイエンス委員会脳科学作業部会の中間取りまとめが「ライフサイエンスの広場」で公開されているとの情報が提供された。5つの重点課題としての革新的技術・研究基盤の整備・高度化、ヒト脳高次機能のダイナミクス解明、神経疾患・精神疾患に関するヒト病態メカニズム解明、デジタル空間上で再現する脳モデル開発・研究基盤の構築、神経疾患・精神疾患の治療等のシーズ開発に加え、基礎と臨床の連携、産学連携、ドライ

とウェットの融合などの異分野融合、研究基盤の整備・共用、研究成果の取りまとめ機能などをもつ中核拠点を整備することが示されているとの情報も提供された。

高橋(良)脳とこころ分科会委員長から、上記中間取りまとめについて、予算額を含めた詳細情報が提供された。研究・実用化支援班を整備すること、ガバニングボードを設置し、関係省府省間連携、基礎臨床連携産官学連携を推進することが検討されていることも報告された。

柚崎委員から、日本神経科学大会で日本の脳科学を元気にするために研究費とキャリアパスはどうあるべきかに関するシンポジウムが開催されたこと、そのシンポジウムで、文部科学省科学技術・学術政策局 研究開発戦略課(現 ライフサイエンス課長)の釜井宏行氏より、今後は戦略目標をできる限り広くし、研究者に任せるようにしたい、また、物価高の影響などライフサイエンス研究の問題点について声を挙げて欲しい、生物資源の経済安全保障としての観点についても情報があると嬉しい、予算を取るためにはライフサイエンス・神経科学の必要性を可視化し社会や国に訴える必要がある、などの意見が出されたとの情報が提供された。

以上

文責 古屋敷 智之